

【6年生のみなさんへ（小学校生活残り半年となった6年生へのメッセージ：「学年だより」から）】

これから残り半年の小学校生活となります。私は今毎日のように子どもをこの小学校に入学させたいと思っています。いらっしゃる保護者の皆さんと面接をしています。そこで感じるのは、親の子どもに対する深く、温かい愛情です。子どもたちは本当にみんな大切に育てられていると感じます。皆さんも小さい頃、そして今も同じように親そして家族の優しさと愛情に守られて日々の生活を送っているのです。小学校入学前に学ぶ友だちとのコミュニケーションの一つのとり方として、物の貸し借りの仕方があるようです。自分で使いたいと思うおもちゃや道具を誰かが使っているときに、「貸してください」に対して「いいよ」「ちょっと待ってね」「今使っているからあとでね」などの答え方があることを知り、そういう言葉を使えるようになります。どうしてでしょう。それはそういう言葉を使うことでお互いの心が通じ合うからではないでしょうか。その段階では、誰かに教えてもらうことでそのようなやりとりができるようになることが多いようです。でも、今の皆さんは違います。どんな言葉がよいのかそうでないのかを誰もが自分で考えることができます。ただ、そのときの自分の心のあり様によって、分かっている自分の思い描く自分の姿でいることができなくなってしまうことがあります。小学校卒業までの時間、それを少し大人になるための準備の時間とするならば、自分の心のあり方を考え、自分の理想とするものに近づけるためにはどうしたらよいかを日々の実践を通して学ぶようにしてほしいと強く願います。

【本当に受け入れるとは】

川崎医療福祉大学の佐々木正美先生の講演記録に、「コミュニケーションの定義として《人と喜びを分かち合う、喜びを共有し合う》というものが私は好きです」とありました。

私はこれまで、コミュニケーションというと、一般の辞書にあるような「人間の間に行われる知覚・感情・思考の伝達」と理解してきましたので、佐々木先生のお考えのような、喜びを分かち合う・共有し合うということを結果的にそうなるべきものとは思っていましたがそれを定義とするということまでは考えたことがありませんでした。

佐々木先生は、自閉症などの研究に携わっていらっしゃる方で、その講演記録には私のような者でも一つひとつのことがらについて分かるように述べられていました。

その中に、自閉症と思われる子を持つ両親が、子どもの状況をなかなか受け入れることができないことがあるとありました。「それは、わが子の障害を受け入れないということですが、実際はわが子を受け入れないことになってしまって、その子の持っている特性、障害を治そうとしてしまいます。治らないものを治そうとするのは、治される側からするとひどく苦痛なものです。そして、本来持って生まれた特性ではない二次的な障害をその上にのせてしまって、大変不幸な子どもや青年や人々をつくってしまうことが非常に多いのです」

ここに述べられたことは、私たちの毎日の教育活動、子どもたちの活動、ふれ合いの中においても、とても意味深いものであると思います。何らかの理由で授業に上手に参加できない子どもがいると、ときにその原因を本人のやる気の問題と考えたり、教師の指導力や学校の教育方針が原因だと考えたりすることがあります。絶対にそうではないとは言えないことですが、大切なことは目の前にいる子どもの実際の様子を理解し、受け入れることだと考えます。

「子どもの今を受け入れる」と言ってきた自分がいます。でも、そこには受け入れる覚悟と強い意思がないといけなことを改めて感じています。また、子どもの成長を支援していく親や教師が心一つにしていくことが問題解決への近道であり、正しい方法であることを皆さんと改めて確認したいと思います。

【校長室で】

今、校長室の前には「どうぞおはいいろください」「いまへやにいません」「がいしゅつしています」などのカードが置かれるようになっていました。そのカードは以前からあったものですが、普段あまり使われていないのを見つけた子がそのカード入れをわざわざ家で作ってきてくれました。このような小さな工夫を一緒にしてもらえることを大変嬉しく思いました。

部屋に入ってくる子どもたちの多くは、「おはようございます」「失礼します」と挨拶をしっかりとすることができます。また、遊んでそれぞれの教室に戻るときも「失礼しました」と言える子が多いです。自分が遊んだ場所をちょっと振り返って、忘れ物はないか、片付けはちゃんとできているか、というようなことを確認させるように声をかけなければならないこともありますが、その声かけが必要ない子も多いです。できれば、子どもたちがお互いに声をかけ合って自分たちがやるべきことをちゃんとできるようになってほしいです。今は、必ずそうなると思いながら子どもたちの様子を見ている毎日です。